

O-03: 手に取る宇宙～Message in a Bottle プロジェクト@富士山頂

松井紫朗¹, 小山田徹¹, 本原顕太郎², 高橋英則², 古屋梨奈³, 佐藤雄⁴, 堀切春水⁵

1.京都市立芸術大学, 2.東京大学, 3.アーツカウンシル東京, 4.早稲田環境研究所, 5.アートコーディネーター

1. はじめに

私たちを取り巻く世界の解釈について、科学は計測値による実証を目標とするが、芸術は作品鑑賞という経験を通した直感的な理解を目指す。「手に取る宇宙～Message in a Bottle」は、国際宇宙ステーション軌道上の「宇宙」が封印されたガラスボトルを地球上のさまざまな人々が手にするという経験を通して、日常とは異なる立ち位置から、経験者それぞれの存在についての新たな理解を可能にする芸術的活動である。地理的、文化的、歴史的に特徴のある場所に於いてこの活動を展開中であるが、富士山頂はこのプロジェクトにとり、特に日本の中で一番宇宙に近い重要な場所と位置付けている。



2. 実施内容

8月7日、測候所内八畳の間に於いて、この日まで滞在されていた浅野勝己筑波大学名誉教授にもご参加いただき、茶会の見立ての「手に取る宇宙」の富士山頂ワークショップとなった。(図1)

測候所入り口の戸板一枚を板床に見立て、その上には、朝から近辺で探し求めた山頂の石、用意していた果樹天馬紹巴図帛紗の上に宇宙が詰まったガラスボトルを飾り付けた。(図2)

茶をいただきながら「手に取る宇宙」プロジェクトの発想とガラスボトルに宇宙が取り込まれ地球に持ち帰られるまでのさまざまな経緯の説明を行う。

その後、2013年、星出宇宙飛行士の国際宇宙ステーション滞在時にロボットアームを使ってガラスボトルに獲得された宇宙を各自手に取る。(図3)

そこで感じたこと考えたことを用紙に書きとめる。それらは、アーカイブとして Web 上の「手に取る宇宙」のホームページ(<http://www.m-in-a-bottle.org>)に蓄積され、未来の人類に向けたメッセージとして伝えられていくこととなる。(図4)



図1 測候所内八畳の間。



図2 床飾り。

このワークショップの後、下山までの待ち時間、測候所を出て火口を一周することとした。天気は快晴で日差しも強かったが肌寒くもあり、黄色いヤッケを着ての富士



図3 ガラスボトルを手に取る。



図4 感じたこと考えたことを書きとめる。

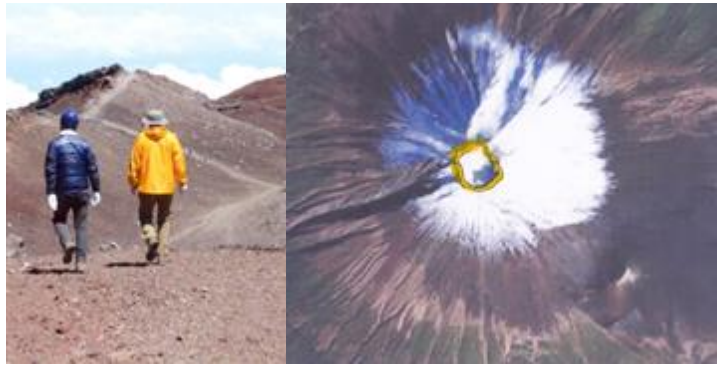


図5 御鉢めぐり。

山御鉢めぐりとなった。まだワークショップの気分を保ちながらの行動であった為か、高いところから下界を見下ろして回るというより、さらに上方から自分自身が今どのように見えているのだろうかという所に意識があった。黄色いヤッケを着て行動している自分、その軌跡を連続的に辿り、記録することを想像していた。(図5)

3. まとめ

この「手に取る宇宙」プロジェクトにとって、日本で宇宙に最も近い場所でワークショップを行えたことは意義深い。これに連なるさまざまな場所での展開に於いて、たとえばその場所が地球上のとがったところ、逆にへこんだところ、というように、地球と宇宙との関係性の中から自身の位置を想像するような視点に経験者を誘い出してくれるのではないかと期待するからである。

参加者が少人数の中、ワークショップに、人とコト、モノに新しい関係性をもたらすフォーマットである「茶」を用いたことは、参加者それぞれのこれまでの活動とこの場所とを結びつける上で効果的であったと思う。また、「御鉢めぐり」のような場所の特徴と行為を積極的に結びつけるようなパフォーマンスの経験も、今後のワークショップの内容を考える上で収穫であった。

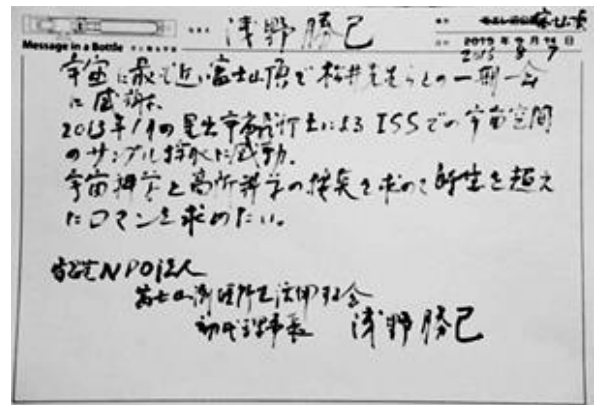


図6 ワークショップに参加した浅野勝己初代理事長のメッセージ。

4. 謝辞

今回、NPO法人「富士山測候所を活用する会」のトライアル利用として採択いただき感謝する。とりわけ、この富士山測候所の存続と活用に当初からご尽力され、またご自身も活用しながら見守って来られた浅野勝己筑波大学名誉教授にワークショップ参加頂いたことに感謝する。